

MAMIYA CAMERA-PHOTO LIFE SUPPORT



マミヤカメラクラブ

マミヤカメラクラブはマミヤカメラをご愛用の方ならどなたでもご入会いただける写真クラブです。マミヤカメラクラブ会報誌 (Mamiya Gallery) の発行 (原則年2回)、プロ写真家による撮影会・勉強会・セミナーの開催、webギャラリーで会員の作品展示、マミヤ製品修理・点検料金の割引等と会員特典もたくさんあります。マミヤカメラに関する情報、会員相互の親睦と写真技術向上をめざし、素晴らしい写真の世界をご堪能ください。



入会費用

入会金 1000円 (税込)
年会費 3000円 (税込) ご入会日より1年間。
※但し2年分の年会費をご入会時にお納めください。

特典

- マミヤカメラクラブ会報 (Mamiya Gallery) の発行。
- クラブ撮影会の開催。
- 勉強会・セミナーの開催。
- ホームページ上に会員作品ギャラリーの開設。
- マミヤ製品修理・点検料金の割引。
- 会員証、オリジナル会員バッジ提供。
- オリジナル会員名刺制作 (有料)。

●製品・修理に関するお問い合わせは、サービス受付へご相談ください。

- 修理をはじめオーバーホール、清掃等を承ります。
- 操作上の疑問にもお答えしています。

Phase One Japan 株式会社

物流センター内サービス受付

〒385-0052 長野県佐久市原 547

TEL.0267-62-8036 FAX.0267-62-8137

営業時間 9:00~17:50 土、日、祝日は休業



マミヤカメラクラブ事務局

〒113-0033 東京都文京区本郷 3-39-14 ワイズビル 株式会社ワイズクリエイティブ内

TEL.03-5689-2776 FAX.03-5689-2786

E-mail :info@mamiya-club.com

- マミヤカメラクラブの入会お申込み等お気軽にお問い合わせください。
- 撮影会・イベントのお申込み・お問い合わせを承ります。
- 下記、ホームページでも詳しくお知らせ致しております。是非ご覧ください。

マミヤカメラクラブホームページ <http://www.mamiya-club.com/>

●株式会社ワイズクリエイティブでは、下記のような業務を行っています。

- フェーズワン製品・大中判カメラ販売を致しています。
- 撮影アクセサリ、ザックの販売を致しています。
- プロラボ現像・プリントを承ります。
- 撮影会・ワークショップ・セミナーを開催しています。

ワイズクリエイティブは写真を通じて人と人、人と自然とのコミュニケーションを確立する事を目的とするフォトオフィスです。

大中判カメラ専門ショップを展開、自然写真家、山岳写真家による写真セミナー、撮影会の開催、写真集の出版、写真レンタル、各種制作業務等、写真に関するソフトとハードあらゆる業務を行います。

www.yscreate.co.jp



Mamiya Gallery



マミヤカメラクラブ会報誌

29

© Photo by N. S. Yamaguchi



「草紅葉の尾瀬」只今本番中。 尾瀬の写真仙人・花畑日尚さんに聞く。

花畑 日尚 (はなはた にっしょう)
1939年京都府宇治市生まれ。1962年日本写真学園卒業。1975年山岳写真家を志して独立。以来、山岳雑誌を中心に作品を発表している。特に尾瀬と北アルプスを中心に撮影活動を行う。著書に「日本の名峰8尾瀬カ原・燧・至仏」「同9日光、足尾、南会津」「同22槍、常念、燕岳」「花畑日尚写真集 尾瀬」「丹沢」「諸国名山案内3関東」「お花畑。(山と溪谷社)」「尾瀬撮影ガイド」(ニューズ出版)等多数。



「晴れ行く湿原」 300mm 尾瀬ヶ原・中田代
表紙 「朝の木道」 105～210mm 中田代

八月の暑い日差しの中、一年中変わらぬ日焼けした元気なお顔でご来社頂きました。その方は「尾瀬の写真家は誰？」という質問に誰もが一番最初に名前が挙がる花畑日尚さんの登場でした。「先週、尾瀬から戻ってきて、また来週には尾瀬に行くよ」とまるで近所に出掛けるようにお話しされます。「尾瀬の写真仙人」とも呼ばれ、尾瀬を題材にした写真集やガイドブックを出版し、更には尾瀬関連のテレビ番組にも数多く出演された花畑日尚さんに、これから秋本番を迎える尾瀬と写真についてお話をお聞きしました。因みに「尾瀬の写真仙人」と言い出したのは私で花畑日尚さんの公認も頂いています。(木戸)

尾瀬との出会いは――

北アルプスの山を中心にして撮影をしていましたが、写真が好きで、とにかく一年中写真を撮りたくて、北アルプスの端境期に初めて尾瀬に写真を撮りに行きました。40年前、確か 35-36 才の頃でしたが、その頃は、尾瀬なんか山とも思っていませんでした。ところが足を踏み入ると、大好きな大判カメラにはうってつけの場所であることを発見しました。それは大判カメラのアオリを使って撮影するパンフォーカス写真にベストマッチしたからです。6月頃の尾瀬に行く和新緑、水芭蕉が美しい、北アルプスの夏を撮影後、9月の尾瀬は紅葉が始まり草紅葉素晴らしい、11月の北アルプスの新雪撮影が終わると、尾瀬には雪とどんどん尾瀬にはまっていきました。

その後、尾瀬の写真を見た山と溪谷社の担当者に「尾瀬の写真集を出してみない？」と言われ、更に尾瀬に行く機会が増えてゆきましたが、写真集を出すからには集中的に尾瀬を撮影しました。

また、尾瀬の写真を発表していると、あちこちから「尾瀬の写真が欲しい」とリクエストをもらうようになりますが、要望の写真が無いと悔しくて、更に撮影を重ねると言う状態でした。尾瀬の取材は長期になる事もありましたが、1回最低でも7～10日間を掛けて、尾瀬の全てのエリアを廻るようにしています。

尾瀬のどんな写真が好きですか――

何と言っても朝霧の出ている時、尾瀬の朝霧に魅せられて撮影していると言ってもいいでしょう。白樺と後にある緑の木々の間に朝霧が入り、白樺が浮かび上がっているように見える場面が最高です。朝霧は四季を通じて出ますので、季節を変えて撮影をします。初めて尾瀬に入った頃ですが、早朝に山小屋の窓を開けると、一面が真っ白で「曇っていて撮影はダメか」と思い寝直し次に起きると、日差しが差し込み快晴、白かったのは朝霧だったと初めて気付いたという失敗もあります。もう40年も前の話ですが・・・。

また、尾瀬は盆地のため日没が早いですが、夕焼けや斜光を活かした撮影を心がけます。花の時期は屋間に花の写真を撮りますが、草花は風で揺れて撮影は難しいですね。

木道での撮影について――

尾瀬には木道の上を歩くというルールがありますから撮影時にも必ず守ります。5月連休までは雪のお陰で何処でも歩けますが、その他の季節は、気象条件を利用する、レンズを変えるなどして対応しています。木道上での撮影は歩く人の振動等に気をつけなければなりません。また、撮影をしていると「写真家の花畑先生ですか」と良く声を掛けられることがあります。可能な限り対応するようにしていますが、先ずシャッターチャンスを優先してその後の対応とさせてもらっています。何せ声を掛けられることが多いもので。

昔の木道は地面ギリギリにあり何とも言えない色気があったのですが、大雨が降ると湿原に水が集中し木道が水浸しになると言う事で今では段々と高くなっています。水が出る場所だけ高くすればよいのですが、一様にみな高くなってしまっているのが残念です。

尾瀬を撮影した最初の頃は人工物の木道を極力構図に入れないように撮影していましたが、今は木道は尾瀬の一部、立派な被写体と考えて撮影に活かしています。



『朝焼けと燧ヶ岳』 55～110mm 下田代

尾瀬、今と昔について——

尾瀬の山小屋数は変わりませんが、昔と比べ山小屋に宿泊する人は減っていると思います。日帰りで訪れる人が多いように感じます。ですが尾瀬はゆっくり時間を掛けて歩いて欲しいと思いますね。また、自然のサイクルで大きな被写体と言える湿原の中の白樺が枯れてしまうことがあります。何本かの白樺が列んでいたのが本数が減って光景が変わってしまいますね。ですから写真を見るという頃撮影したものか分かりますよ。

尾瀬でよい写真を撮るには——

尾瀬での撮影で一番良い時間帯は早朝です。良い写真を撮影しようとしたら、山小屋に泊まることをお勧めします。日帰りですとシーズン規制時には5時迄入山ゲートが開きませんので、どんなに急いでも朝霧の出る時間には間に合いません。前日に入りゆくり木や花の状態をロケハンして、翌朝の日帰り登山者が来ない早い時間帯で撮影するのが良いでしょう。

また、撮影に一番良い時間帯が丁度山小屋の朝食時間と重なりますので、山小屋に相談して朝食時間をずらしてもらおうか、朝食用おにぎりの用意を事前をお願いして撮影に専念することもひとつの方法でしょう。

私も尾瀬の事を分かるまで10年近く掛かりました。長く尾瀬に通っていると何処にどの様なものが在ること等全て把握できるようになりました。要するに、通えば通う程に尾瀬の面白さが解り、良い写真が撮れるようになるでしょう。

技術的なことを言えば、大判カメラでは近景、中景、遠景全てにピントを合わせるパンフォーカスアオリが使えますが、中判や35ミリカメラの場合は、レンズの持つ被写界深度を利用してピントの合わせるポイントを掴むことが大事になります。ですからかなり絞り込んで撮影する機会が多くなりますので、カメラブレを防ぐ三脚は必需品となります。



『快晴の朝』 105～210mm 中田代



『静かな池塘』 55～110mm 白砂湿原



『朝霧流れる』 105～210mm 上田代



『霜の朝』 55～110mm 上田代

カメラマンの移り変わり——

近頃気付くことは、尾瀬を写すカメラマンがポイント、ポイントでさっさと写真を撮ってさーっと移動して行くことです。きっと雑誌で紹介されていたポイントなんだろうが、ただ写真を真似て撮影しているとは思えないのです。写真を撮始めた最初は真似ることが必要かもしれませんが、ある程度経ったら、もの真似で終わらずにオリジナリティを大切にしたいと思います。自分の視点で構図を切り取り、シャッターを切って欲しいと思います。

写真がフィルムからデジタルに変わり、1枚の写真からの加工で朝景や夕景などいろいろなパターンを作ることが可能になってしまいました。写真加工はそれはそれで面白いですが、現実ではありませんので、是非とも現場で見たものを忠実に再現して欲しいと思っています。

秋本番の尾瀬ですが撮影ポイントは——

枯れる前の色づく草紅葉が一番良いのは9月中旬です。まだ周りには緑が残っていますので、緑の中、湿原だけが色づくのは被写体としても何とも言えません。もちろんその時に朝霧があれば最高ですね。8月下旬からはヒツジグサも色づき、湿原のヤマドリゼンマイ、ウルシ、ミネザクラの紅葉と続きます。是非、山小屋に泊まって、良い写真を撮影してください。

また、朝方、霜が降りた時には木道がツルツルになりますので歩くには注意してください。クマは出ない頭で無い限り大丈夫ですが、特に早朝クマが活発に動きますので鈴を鳴らすなどして気を付けてください。



『朝の麓ヶ岳』 55~110mm 下田代



『秋たけなわ』 55~110mm 中田代

マミヤカメラについて——

マミヤ 645 を使っています。マミヤのカレンダーもこのカメラと尾瀬を題材に3~4回担当させて頂きました。マミヤ 645 の良いところはフィルムバック交換ができることです。ポジフィルムでもタイプの違うフィルムを用意していて、その場のシチュエーションで使い分けたりしています。レンズは 35mm、55~110mm、105~210mm、300mm の 4 本を所有していますが、尾瀬は長めのレンズの使用頻度が高いので木道から 105~210mm レンズを多用しています。

アマチュアカメラマンへのメッセージ——

先にも言いましたが、デジタルカメラ主流のせいか、あまりにも被写体を見ないカメラマンが増えていると思います。時間を掛けずにシャッターだけ沢山押して行ってしまうカメラマンを見ると「この人何を撮っているのだろうか?」とってしまいます。フィルムでもデジタルでも写真の本質は変わらないので被写体をじっくり見て撮影して欲しいと思います。写真はカットを多く撮るものではなく、充分に注意を払いながら基本に戻って撮った時を大事にしてください。

今後の活動は——

今、76 才ですから、あと 4~5 年は撮影を続けたいと思います。ただ、自分でカメラを背負って歩きたいですね。山小屋の主人が荷揚げと一緒にカメラを運びましょうか言ってくれますが、もしカメラを背負えなくなったら尾瀬にも行かないかもしれませんね。写真が好きでスタートした写真家なのでから。





長野県 銅倉高原

『私のカメラライフ』

仕事のかたわら趣味で写真を撮り始め8年程経ちました。学生時代に写真を撮っていたのでやっぱり戻ってきたという感じです。その頃はスナップ写真をとっていましたが、今では風景写真にドップリついています。

愛用のカメラはマミヤ7Ⅱ・大判カメラ2台・キャノン5DM2です。マミヤ7Ⅱは山登りなどではコンパクトに取りまらた機動力もありお気に入りです。本気モードの時はフィルムカメラで撮影に行きますが、せっかくフィルムで撮影してもダイレクトプリントが無くなってしまい残念です。時代は完全にデジタルに移行してしまったように感じます。レコードがCDに代わりましたが、レコードの愛好家もまだまだおられるのと同じように私も暫くはフィルムで撮影を続けて行きたいと思っています。

主なフィールドは日光・尾瀬・信州・富士などで、仕事の都合上長期休暇がとれず長野から福島辺りまでは日帰り撮影にでかけ、『森・水のある風景・花のある風景』などを撮っています。

マミヤカメラユーザーを訪ねて。



増田 勝(ますだ まさる)

1956年生まれ。埼玉県越谷市在住。写真、マラソン、そば打ち・・・趣味と仕事に全力活動中。マミヤカメラクラブ会員、ワイズ大中判写真の会、日本リンホフクラブ会員。



群馬県 上発地



長野県 北竜湖



福島県 花見山



長野県 銅倉高原



長野県 不見の滝



群馬県 赤城山



山梨県 土竜の滝



長野県 御射鹿池

銀塩フィルムのプリント・現像に拘る フォトグラファーズ・ラボラトリー社・平林 達也さんに聞く。

写真をキーワードに生の声を聞く。
この人を訪ねて 8



今回、登場頂くのは、銀塩写真フィルムのプリントと現像に拘り、素晴らしい技術を多くの写真家に提供し続けるフォトグラファーズ・ラボラトリー社の平林達也社長です。同社を訪れるのは初めてで、案内にある最寄り駅、3駅の中から徒歩15分という一番時間の掛かる地下鉄・赤坂見附駅を選び歩きました。赤坂見附駅周辺は沢山の店舗が立ち並び繁華街ですが、少し歩くと落ち着いた感じの住宅地の雰囲気が漂います。同社が在るのは赤坂リキマンションというビルで、屋上に黄色い「R」文字があるので歩いてでも直ぐ認識することができました。平林達也社長にお話を伺い、ラボ内を案内頂き写真撮影を行いました。（木戸）

平林 達也（ひらばやし たつや）
1961年生まれ。
東海大学卒業後、株式会社ドイに入社。ドイテクニカルフォト部に在籍時に同社が倒産。2003年12月、当時最も技術力が高いと評価されていた、ドイ・テクニカルフォトの技術を継承し、有限会社フォトグラファーズ・ラボラトリー社を設立。ご自身も写真展や写真集を出版するほどの写真家の一面を持つ。



有限会社フォトグラファーズ・ラボラトリー
〒107-0052
東京都港区赤坂7-5-34 赤坂リキマンション
TEL / FAX 03-3583-1607
【ホームページ】
www.photographers-lab.com

屋上に「R」の文字、赤坂リキマンションにあります。

《営業内容》

- フィルム現像（カラーポジ、カラーネガ、B/Wネガ）
35mm・120・220・4x5、5x7、8x10）
- カラー銀塩写真プリント
フィルム（ネガ・ポジ）・データもキャビネから大判紙など定型サイズ、大型プリントまで。1枚の場合/最大1.2mx3m（つなぎによれば更に大判サイズ可）
- B&W銀塩アートプリント
印刷紙はバライタ・RC共に取り扱い、定型サイズから大型プリントまで。
1枚の場合/最大1.2mx3m（つなぎによれば更に大判サイズ可）
- スキャニング
- 高品質カラーポジ複製デューブ 35mm～4x5inchまで
- 高画質インターネガ制作



壁面3メートルの8x10インチ引き伸ばし機の前で説明する平林社長。



インターネット発注も大丈夫なメールオーダーシート。

——ドイ・テクニカルフォトの技術を継承されているのが フォトグラファーズ・ラボラトリー社との評判ですが・・・？

2003年8月「カメラのドイ」が民事再生法により、当時最高のプリント技術と評価されていたドイ・テクニカルフォト部の仕事もデジタルへの変換を余儀なくされ、面露光業務を辞めてしまう事が決定しました。当時、同部署で作家担当をしていた関係上、技術者の受け入れ先を探していましたが、ラボにとって多難な時代で多くのラボが廃業・倒産してゆく中では技術者を引き受けるという会社はありませんでした。

そんな時、知人から、現在会社の在る赤坂リキマンションのボイラー室が使えるのではと知らせを受けました。ボイラー室ならば、電気もガスも水道もあるので改修すればラボとして使えるのではと思いました。これには、同年12月にドイの板橋ラボの閉鎖が決まっており、翌年1月、2月に担当していた大きな写真展開催も迫っていた事があり、ラボとしてスタートさせたいと思いました。しかし、ラボを造るには港区からの営業許可を受けなければいけないことも解り、会社を法人化したり、機材の手配をしたりで大変でしたが、多くの方々の協力を頂き何とか2003年の12月にスタートすることができました。

—— ラボを立ち上げた時の苦労は・・・？

機材の調達と設置が大変でした。民事再生中のためドイからは機材を譲り受けられませんでした。丁度その頃に廃業したラボからかなりの機材を調達することができました。機材そのものの金額よりも、ボイラー室に搬入・設置する費用が大変でした。先ず地面を平らにして、面露光のために壁の直角を出し、ペーパーを止める大きな鉄板も埋め込みました。そんな大工事で、軽く会社の資本金をオーバーしてしまいましたが、本当にありとあらゆるところからの協力を頂きました。

—— ドイ・テクニカルフォトの技術の継承について・・・？

フォトグラファーズ・ラボラトリーの設立で私が代表取締役になりましたが、ドイ在職時の先輩、上司であった技術者の皆さん6名と一緒にスタートできたのでドイ・テクニカルフォトの技術の継承が叶ったかと思っています。設立時には42才だったのが今は55才、その間に東日本大震災やリーマンショックなどが起きましたが、何とかそれらの危機を乗り越え、今日でも技術継承はできていると思います。

—— フォトグラファーズ・ラボラトリー設立の一大決心は・・・？

ドイ・テクニカルフォト時代に作家の担当をしていて、作家の作品が美術館等に収蔵されるのを目的にします。そして、この時代のこの作品を50年後、100年後、200年後の人達が見る可能性があります。そんな、この時代の写真創りに携わった人間が、絶対的なモノは残せない、ちゃん

とした技術を残したいと言う気持ちが強かったのです。

当時のデジタル技術からして、未だ面露光の方が上だと思っていました。インターネガを創ったりダイレクトプリントで焼いたり等です。それを考えた時に、これらの面露光技術を継承しなければならないと思ったのです。何時の時代でもスペシャリストは必要だと思います。

技術者は全員が先輩や上司だった人達で、多少のやりにくさはありますが、これからも作家さんの信頼を頂けるような技術継承を考えていきます。

—— ご自身も写真作家として活動されていますが・・・？

元々写真が大好きでした。高校卒業後は写真学校に行きたいと思っていたのですが、当時の写真の師匠や両親からのアドバイスで普通の大学に進学しました。ただ大学では写真部に入っていましたよ。大学卒業時、「ドイは凄い技術を持った会社」と聞きドイ・テクニカルフォト希望で入社しました。始めは店舗に配属され多少腐ってしまう時代もありましたが、最終的にドイ・テクニカルフォトで退社しました。

写真は小説家が小説を書いて発表する様に、「自分の世界をどうやって写真で表現するか」を伝える為にやっています。今までもドイフォトブラザーで2回、ニコソラコで2回、ヒットオンで2回、他の会場でもかなりの個展を開催してきましたし写真集も出しています。自分が写真を好きだから、作家と共感できるのかもしれないね。

—— フォトグラファーズ・ラボラトリーの一歩の売りは・・・？

他のラボと違うのは、直ぐ近くに技術者が居ることです。直接技術者と話せたり、相談したりすることができます。スタッフ全員が写真に対して真摯な態度で向き合っています。品質を優先して、お客様の身になって仕事をしていますから、信頼して頂いて大丈夫ですよ。

また、今では他ではできなくなってしまった、インターネガやデューブの制作もできます。業務の中では面露光が最も得意とする分野で、8x10インチに至っては、引き伸ばし機が2台、壁面3メートルもあるラボは他にないと思っています。

その他、ホームページをご覧頂ければ遠地からでもメールオーダーもできますので何でもご相談ください。



3.8坪もあるラボの内部は、まるで潜水艦の中のように複雑です。



これぞ匠の技を持つ技術者の仕事場という感じで。



プロ用フィルムスキャナもありませんのでいろいろの対応ができます。



大きなライトテーブルもあり、プリント校正はこの場所で行います。



受付では平林達也社長の写真集も販売されています。

